目　次

第一部（寺田寅彦全集　第七巻　所収）

一　水団扇の巻……3
二　名古屋の城の巻……17
三　炭竈の巻……33
四　雪の蓑の巻……47
五　胡蝶の巻……60
六　みちのくの人の巻……71
七　流石に春やの巻……87
八　霜降りる頃の巻……102
九　文鳥の巻……115
一〇　藁の小馬の巻……131
一一　温泉の二階の巻……143
一二　柘榴の巻……158
一三　コスモスの巻……173
一四　旅なればの巻……188
一五　花蘇枋の巻……203
一六　蛙妻よぶの巻……220
一七　磯馴松の巻……235
一八　旅寝の巻……250
一九　乗合の巻……266
二〇　熟柿の巻……282
二一　山の戸の巻……295

第二部（折口信夫全集第二十八巻所収　定本柳田国男集第三巻所収）

二二　麦うちの巻……311
二三　葱坊主の巻……325

二四　赤頭巾の巻……340
二五　達磨寺の巻……359
二六　かな蛇の巻……374
二七　若薄の巻……388
二八　鳴沢の巻……405
二九　初霜の巻……419
三〇　うらゝかやの巻（倚燈四吟）……433
三一　夢のあとの巻（浴泉四吟）……449
三二　柘の花の巻（箱根山中三吟の一）……465
三三　夏山家の巻（箱根山中三吟の二）……480
近代連句索引……495
参加者略歴……515

第一部

一　水団扇の巻…3／二　名古屋の城の巻…17／三　炭竈の巻…33／四　雪の蓑の巻…47／五　胡蝶の巻…60／六　みちのくの人の巻…71／七　流石に春やの巻…87／八　霜降りる頃の巻…102／九　文鳥の巻…115／一〇　蕨の小馬の巻…131／一一　温泉の二階の巻…143／一二　柘榴の巻…158／一三　コスモスの巻…173／一四　旅なればの巻…188／一五　花蘇枋の巻…203／一六　蛙妻よぶの巻…220／一七　磯馴松の巻…235／一八　旅寝の巻…250／一九　乗合の巻…266／二〇　熟柿の巻…282／二一　山の戸の巻…295

（寺田寅彦全集第七巻所収）

寺田寅彦全集の中に、寅彦と松根東洋城と小宮豊隆三名で作った連句があるので、それを中心に研究会をはじめた。

その前に蕪村の連句研究、芭蕉の未完成連句研究をやって、江戸時代の連句文学の二つの頂点に迫ったのであるが、合評形式には限度があるので、どこまで成功したかは今もって疑問に思っている。

寺田さんにはわたしは会ったことなく、ただ寺田さんのお弟子の藤岡由夫（物理学、埼玉大学長）氏や、そのつぎに埼玉大学長になった和達清夫（現日本学士院長）氏、二人とも寺田さんの弟子の人であったが、藤岡さんなど手離しの調子で、寺田先生を賛美していた。よほど優れた、若しくは魅力のある自然科学者であったらしく、滅多に人をほめない藤岡さんがよくほめていた。

寺田さんは、夏目漱石の弟子であり、ただ自然科学者でなかったのであろう。自分の哲学を持っていた人、自分の自然科学的立場から人間生活を観察するという風で、言い換れば、人間生活と自然科学を結合して、それを凝視する人であったと思う。

自然科学者にして文学者であり得たのは、そういうところから来たものであろう。そういうところから多くの若い学者たちの景慕を受けたのであろう。

東洋城も豊隆も、江戸時代の文学形式としての連句を取り上げ、それに寅彦も加わって、結局、連歌文学の見直しを行なったものと解すべきであろう。

これは、正岡子規も夏目漱石も果し得なかった、一つの文学的業績として評価すべきものであろう。

（吉田記）

一　水団扇の巻

吉田澄夫　坂本由五郎
鈴木助次郎　能勢頼賢
大橋紀子　福島タマ

吉田　はじめにご挨拶を申しあげます。この連句研究会も相当の年月を経ました。一番はじめには蕪村を中心とした連句を採りあげ、四十回ばかり研究会を催してその度に「学苑」に発表し、それを昭和三十七年に本にしていま世間に行われております。それに続いて何をやるかという事で、何といっても芭蕉の連句のものだというご説も出ましたが、芭蕉の連句は昭和のはじめ頃に東北大学の先生たち、すなわち、小宮豊隆、山田孝雄の諸先生が鑑賞批評をされて、その記録が岩波書店の雑誌「思想」に連載、後に本になっておりますので、それにいたしても二番煎じになります。荻原井泉水先生から、芭蕉の未完成連句がかなり沢山あって、まだ採りあげられていないというお話があったので、私どもは芭蕉の未完成連句の研究会を催し「学苑」に発表いたしました。これも三十数回になり、大体めぼしいものをやりましたので一応うち切り、最近本になりました。

今度は近代文学の中での連句ということで接してみました。寺田寅彦全集の中に、松根東洋城と寅彦、それに小宮豊隆が加わった連句の作品が残っておりますし、折口信夫が（ある時には柳田国男）中心で催したのが折口信夫全集にあります。これからずっと近代連句の意義のある作品を取りあげて鑑賞、批評を続け、その記録をやはり「学苑」に発表するという事を進めて参りたいと思います。私たちは俳諧文学専門ではありません。むしろ鑑賞してそれを中心に連句の気分にひたり、こういうものだという事を味わってゆきたいと思います。それで今度は坂本先生、鈴木先生にお願いして、英文学の方面の方にも別の目でもって批判いただくというわけです。それも文学研究として意義があるんではないかと、ひそかにそういう気持もあるわけです。どうかひとつその辺のことをお含みの上で、存分にお話し合いしていただきたいと思います。今日は寅彦全集の一番最初にあるところの歌仙、大正十四年十月の東洋城主宰雑誌「渋柿」にのせたものです。初めに「水団扇鵜飼の絵なる簀かな」とありますから、水団扇の巻とでもしましょうか、発句は東洋城で、脇句は寅日子とあります。詳しい伝記はあとでつけていただく事にいたしまして、大体東洋城について述べてみますと、正岡子規の門下の人で、学歴は京都大学の法科出身、宮内省の式部官、書記官を歴任した宮内省の役人、子規には早くからついております。

鈴木　松山中学で夏目漱石の教え子だったのでしょう。

吉田　そうですか、一高時代に漱石に師事して俳句を学んだ。